



プログラマー

最後は、「光からの救い・沈黙の輝き」。これは合唱にオルガンとトランペットがくっつく。
「クリスマス」は、もともとは太陽の新生を祝う「冬至の祭り」がキリスト教に取り入れられたもの。
一年で陽が最も短いこの日を境に、闇から新しい光の世界へと入っていくのだ。
太陽の光と、救い主の誕生、即ち”光と救い”とが、重なり合う。
この曲の詩を書いたユダヤ詩人ツェランも、そんなふうに見ていた。
彼はことばで”光”をあらわし、またことばの中に”光”を見る。
最後に願ったことは、自分自身が、その光になること、光に溶け込むこと。それこそが救いだ。
僕は音でこのヴィジョンを追って見ようと思った。

” かつて、
そのころ私は聞いた、
その者が世界を洗うのを、
誰にも見られず、夜もすがら、
まぎれもなく。

一つにして無限なるものが、
なからしめられる、
られる。

光が生じた、救いが。”
(飯吉光夫訳)

.....

最後は、言葉も音も無くなり、「沈黙＝サイレンス」が一番雄弁に輝き出すのだろうか？
Silent Night.

権代敦彦

聖グレゴリウスの祈り

アラン・ホヴァネス (1911~2000) はアメリカの作曲家。父親の祖国アルメニアの音楽やインド・日本・ジャワなどの音楽様式を研究し、作品に反映させた。曲名の「聖グレゴリウス」とはグレゴリア聖歌をまとめたというグレゴリウス1世のことであり、この曲は教会旋法によって作曲されている。

もの皆主の御手に

黒人霊歌の名曲として名高いこの曲は、トリオゼフュロス (ソプラノ：新藤昌子、トランペット：曾我部清典、オルガン：三浦はつみ) のために鈴木隆太によって編曲され、1993年10月川口リリアホールで行われたトリオゼフュロスの初リサイタルで初演された。鈴木隆太は作曲・編曲・指揮の他、クラシックのピアノ・オルガン奏者として、またジャズ・ピアニスト、シンセサイザーのスペシャリストとしても活躍している。